

親鸞仏教センター通信

2002.
June

2002年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail tomo-k35@k6.dion.ne.jp

第2号

親鸞仏教センターの意義

親鸞仏教センター研究員 藤 原 正 寿

親鸞仏教センターは、去る4月26日に新事務所の開所式を行い、新たな第一歩を踏み出すこととなった。首都・東京に真宗大谷派が研究交流の機関を開設した意義をあらためて自らに問うとき、ほぼ百年前、現在のセンターにほど近い巣鴨の地に「真宗大学」という学事施設を試みた清沢満之師の志願を憶う。師は、それまで京都にあった宗門の大学を東京に移転開校することに何を期したのか。「開校の辞」には「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。(中略)即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが本学の特質であります」との表明がある。

封建体制が崩壊し、国家存亡の危機にある日本において、近代的知性を身につけ欧米列強に伍していく人材を養成することで社会貢献を目指す名だたる大学を見据えた上で、それら「他の大学」とは異なる意味を託した宗教の大学。この大学で養成される人物には、同じく時代社会の最先端で学びつつも、仏教を近代の知性で研究するのではなく、浄土真宗を基点として、人と人との連帯しあえる関係を積極的に生み出していくという、他の大学とは異なった社会寄与が期待されている。ここに清沢師の、人間の理性への信頼を依り処とした社会実現に対する危機感が既に示されている。同時に、京都にあって時代社会と隔絶し、そのものが自己目的化しつつある真宗教団を、信を根拠に人と人がつながるための「学場」においてこそ、その意義があるという、本来のあり方に回復していく試みを真宗大学に託したのではなかったか。

現代社会は、清沢師が先駆的に捉えたように、あらゆる意味で袋小路に入ってしまったといえよう。まさに人間の知恵が作り出した深い闇の中であって、出口が見えないという感を強く持つことである。そこで宗教がいかなる役割を果たすのかという問いが投げかけられ、また闇の一端は宗教といわれるものによって引き起こされているという実態も、一方においてある。その意味で、現代社会と真正面から向き合おうとするセンターの意義は重い。近代科学を究極まで突き詰める歩みを止めない現代において、その流れの真ん中に立ち続け、現代のことで現代の闇を破ることばをいかに紡ぎ出すか、清沢師の志願にいかに対応するか、待ったなしの課題である。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 仏教の人間観をめぐって

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

連続講座「親鸞思想の解明」の第2回から第5回が、いずれも東京国際フォーラム（有楽町）で有識者の方々を招いて行われた。センター所長・本多弘之が、親鸞思想と現代社会の接点をさぐりつつ、第2回では仏教の人間観をめぐって、第3回では浄土とヴァーチャル・リアリティをめぐって、第4回では超越の問題と近代科学をめぐって、第5回では再び超越をめぐって、それぞれ問題提起を行い、それを受けて有識者の方々とともに活発な意見交換がなされた。第2回の一部をここに紹介する。 (越部良一)

■ 菩提心の復権

現代が混沌としているとか、方向が分からなくなっているということの一番の問題というのは、人間像がほとんど消え失せているということにあるのではないかと思います。人間を根源的に鍛え上げていくこの苦悩の娑婆、この苦悩の人生というものの意味を、本当に見直すという智慧をもつことができないままに、経済価値のみが人間の価値であるといったような、戦

後の歩みの中で皆さんもご承知のような、経済的人間像が人間だというふうになってしまった。

現代のどういう領域に関わっているにしても、一生懸命にやっていることの根源的意味に対する自信喪失というようなものがあるのではないか。人間存在自身に対する深い信頼というものが欠落したのではないか。自己自身の根源的な立脚地というものに対する深い、ことばでは表せない深い信頼というようなものが、特に戦後以降の、これから日本を担う人たちにどうも伝えられていない。こういう危機感を私は感ぜずにはおれないのです。仏になろうと歩む存在としての人間像の復権、菩提心の復権、そんなことばで言ってしまうと、何かちょっと肩をいからすようなことになりますけれども、別のことばで言えば、愚かな煩惱具足の凡夫のままに歩んでいけるということ。そういうことを思うわけです。

■ 時の中で時を切る

仏になろうとする意欲が菩提心です。菩提心の復権といった場合、これは自力の菩提心ではない。横超^{わうちょう}の菩提心です。自力の菩提心は、自分で縦方向に超えようとする。「横超」とは、横ざまに切ってくる、横ざまに超えていくこと。ある意味で全然超える方向をもっておらず、平面にどんと座っているままである。愚かな凡夫たるわれらは、自分では縦方向に絶対に超えられない。自分で超越などまったくできない。にもかかわらずそこに如来からの、大悲からの根



源的な力のはたらきがこの身に感ぜられることで、愚かな凡夫たるままに、超えずして超えるというような、ある意味で超越性が自覚される。

「横超断四流^{おうちょうだんしりゅう}」という善導大師のことは、親鸞聖人は大切に取り上げられた。四流というのは生老病死の四つ、あるいはこの人生の中で暴れ馬のごとき欲というのが四つ数えられていて、それを四流という。それを断つ、横ざまに切ると。われらは愚かな凡夫であり、煩惱のままに生きるしかない存在だけれども、十方衆生を救わんとする如来の呼びかけに信頼するという信念、本願の信念をいただくならば、その時に、即時に横超断四流であると、こういう随分思い切った宣言を親鸞聖人はしておられる。この現生^{げんしやう}の今の一念一念のこのひとときを、何よりも大切な、一番失ってはならない時として生きることができる原点を、親鸞聖人は「信の一念」とおっしゃった。流れていく時の中にあって、時が止まるような、時が切られるような、そういう時をもつことができるのが信の一念であると。信心がそこに、切断的な時をもつ。時の中にあって時を切るというような意味が、南無阿弥陀仏の一念に立つことにはある。南無阿弥陀仏の一念は生老病死を切ると。

流転のいのち、流され流され、転がされているような哀れないのちが凡夫のいのちである。凡夫というものは、頑張ろうとしても頑張れないし、たとえ頑張ってみてもくたびれ果てる。状況に流され、煩惱に流され、ある意味で自分というものがもてずに、流され転がされてしか生きられない哀れな存在である。こう言いながら、そういうふう流されていく時間を断つような力を与えるものが本願の信念だと。本願の信念をいただくなら、凡夫のままに、一挙に仏になることができるような時をもち、生老病死の苦悩の人生を一挙に断つといってもいいような時をもつことができる。この現生の意味の転換、そういうことを、親鸞聖人は力を込めて語ってくださったのだと私は思っております。



本多弘之所長

■ 決して死なない信念

現代は、ある意味で刹那主義^{せつな}と言いますか、多く人はこの人生が終わったらみんな消えてなくなるくらいのもりでこの人生を生きている。虚無的人生観、何か生きていながらこの人生が終わったら全部終わりだというような人生観。どうするかという目的もないし、どうなるのが本当によいのかという価値観や意味づけも曖昧な、それこそ人間像が曖昧な人間観。そういう時代にあってなおかつ、それならばなおさらのこと、現代の時の意味と価値を本当の意味で回復するという課題を投げかけることができる思想が、親鸞という人にはある。

現在の一念一念に、本当の意味で人間存在を見直し、人間存在を深く信頼し直すことのできる視点というものをいただいて生きていける。たとえ何時われわれの人生が終わろうと、永劫に続く意味をもって、未来の不安の一切を現在の一念に断ち切って生きていける。そういうことであるなら、現在のような虚無主義的、刹那主義的な人生観のなかにあっても、その孤独と悲惨の考え方を破って、新たな刹那の絶対的な意味を開いていける。現代にあっても、決して死なない信念として親鸞が呼びかけていけば、きっと響いてくるものがあるのではないかと、そう私は信じているわけです。

(文責：センター)

うなり。

弥陀^{みだ}の本願には老少^④善惡^{ぜんあく}のひ

とをえらばれず。ただ信心^⑤を要^{よう}と

すとするべし。そのゆえは、罪惡

深重^{じんじゅう}煩惱^{ぼんのう}熾盛^{しじよう}の衆生^{しゆじよう}をたすけ

んがための願^{がん}にてまします。しか

れば本願^{ほんがん}を信ぜんには、他^たの善も

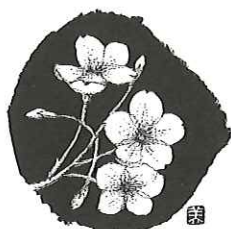
要^{よう}にあらず、念仏にまざるべき善

なきゆえに。惡をもおそるべから

ず、弥陀^{みだ}の本願をさまたぐるほど

の惡なきがゆえにと云々^{うんぬん}

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)



なぜなら、生活状況にふりまわされて、欲から抜け出せずに悩み苦しんでいる私たちをこそ救おうとする願いだからである。

そうであるから、本願の救いに目覚めるならば、どのような善であつても肝心なことではなくなる。それは念仏がどのような善をも超えているからである。また、惡も救いをさまたげると恐れることはない。なぜならば、阿彌陀の本願はどのような惡にもさまたげられないからである。

語 註

①【誓願】本願のこと。本願は、「もし衆生が助からなければ、自分も仏にならない」という誓いである。

②【往生】我々の実在。本願がはたらく場所が浄土である。その本願の世界に生まれて生きることこそ、実在である。

③【攝取不捨の利益】一切衆生を包んで捨てない如来の大きな慈悲のはたらきを受けて、不動の精神的安心を得ること。

④【老少善惡のひと】人間の諸条件による差異(年齢・人種・貧富・能力・性別・経験・善し悪しなど)。

⑤【信心】如来の願いに響いた心。

『anjali』および

『現代と親鸞』を刊行

このたび、情報誌『anjali』第3号(写真上)を発行し、併せて、研究誌『現代と親鸞』(写真下)を創刊しました。

『anjali』第3号では、文芸評論家の加藤典洋氏、日産自動車会長の塙義一氏など、十名の各専門分野の方々に、現代社会や現代人の諸課題について、ご執筆いただいております。

一方の研究誌『現代と親鸞』(年2回発行予定)は、研究成果発表の場と位置づけ、専門家との対話・交流等とおして、現代の課題と親鸞聖人の思想とのつながりを探究し、表現してまいりたいと考えております。このたびの創刊号では、センター設立に向けて開催された「現代と親鸞の研究會」から、社会評論家の芹沢俊介氏、文芸評論家の竹田青嗣氏、神経内科医の平山恵造氏の問題提起と質疑を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

『聖典』の試訳（現代語化）では、歎異抄第一条の現代語訳を試みた。前号で〈序〉を発表したところ、さまざまな反響をいただいた。試訳という消極的な態度ではなく、親鸞仏教センター版の歎異抄として世に問うて欲しいという意見や、本文の現代語訳という補助的な意味合いではなく、「現代の歎異抄」として、新しい歎異抄を作るつもりで制作して欲しいというご意見もいただいた。

現代語訳をとおして感じたことは、すでに了解済みになっていた教言を、もう一度現代という意味場のなかで了解し直すことの難しさと大切さである。教言の解体と再構築の歩みを通すことで、新たな意味世界の開かれることが願われている。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第一条〉

原文

みだ^①の誓願^②不思議にたすけられ
まいらせて、往生をばとぐるなり
と信じて念仏もうさんとおもいた
つこころのおこるとき、すなわち
③せつしゆふしやりやく
摂取不捨の利益にあずけしめたま

現代語訳

人間の思慮を超えた阿弥陀の本願のたいなるはたらきにまると救われて、新しい生活を獲得できると自覚して、本願に従おうという心が湧きおこるとき、迷い多きこの身のままに、阿弥陀の無限なる慈悲に包まれて、不動の精神的大地が与えられているのである。

阿弥陀の本願は、人間のいかなる条件によっても分け隔てや選びをしない。ただ、如来の本願に目覚めるころひとつが肝心なのである。

親鸞仏教センターの動き

（2002・1～5）

■2002年

- 1・8 センター事務始め
- 1・11 第12回研究会議（研究・交流・広報出版等の具体化に向けた協議と実動。以降、14回の研究会議を開催。
- 1・15 情報誌『E.E.』第2号を発行。機関紙『親鸞仏教センター通信』を創刊。
- 1・18 第4回『聖典』の試訳（現代語化）歎異抄研究会。以降、3回の研究会を開催。
- 1・22 『E.E.』第3号への執筆依頼。
- 1・23 現代と親鸞の研究会⑦「いのちの場と医療」・帯津三敬病院名誉院長・帯津良一氏（於・東京ガーデンパレス）
- 1・25 第3回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）。以降、月1回開催。
- 1・26 新事務所（文京区向丘1-13-17）の工事最終点検。
- 1・31 仮事務所（千代田区神田富山町28 風間ビル2階）から新事務所への移転を終了。
- 2・1 新事務所で業務を開始。近隣住民への移転挨拶。
- 2・28 現代と親鸞の研究会⑧「現代における『歎異抄』の学びの視座」作家・高史明氏（於・東京ガーデンパレス）
- 4・1 人事発令（田村晃徳研究員、櫻井智浩研究員）
- 4・2 第1回現代教化セミナー検討会を開催。
- 4・12 「親鸞聖人ご命日のついで」を実施（以降、毎月第一金曜日）。
- 4・26 「開所式」（於・センター）並びに「記念交流懇談会」（於・学士会館「本館」千代田区神田錦町3-28）を開催。
- 5・14 現代と親鸞の研究会⑨「現代社会とカルト」東邦大学医学部助教授・高橋神吾氏（於・アルカディア市ヶ谷）
- 6・1 『E.E.』第3号「親鸞仏教センター通信」第2号を発行。研究誌「現代と親鸞」を創刊。

現代と親鸞の研究会・第2回

“いのち”の場と医療

医師 帯津良一



帯津良一氏

「現代と親鸞の研究会」の第2回目は、1月23日、東京ガーデンパレス（お茶の水）において、医学界から帯津良一氏（帯津三敬病院名誉院長）を迎え、開催した。

このたびの研究会は、癌という病と闘うなかで帯津氏に出あい、現在も帯津三敬病院で治療を受けておられる篠崎一郎氏（板橋区在住・43歳）からのご紹介で実現した。

当日は、癌治療の苦闘をとおして、現在の自分を語る篠崎氏からお話を伺い、その後、帯津氏から問題提起をいただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

〈篠崎一郎氏のお話〉

■ ホリスティック医学と親鸞聖人

5年前、進行胃癌と診断された私は、抗癌剤の治療とあいまって、帯津先生の言われるような、人間をまるごと見るホリスティックな医療といいますが、“いのち”の場を大切にしたい人間の自然治癒力に働きかける治療を並行して行いました。おかげさまで、通常の社会生活を営めるような健康体に戻ることができました。

帯津先生がおっしゃるのは、やはりこころの問題だということです。それが私にとっては非常に勉強になりました。そして、こころの問題となると、私には親鸞聖人の教えが一番スムーズに入ってきたといえますが、常に自分は「凡夫」の身であるという自覚に立ち戻らせてくれる教えだといっています。そういうところに立ってから、こころの平穏が保てるように

なったのではないかと思います。

帯津先生には3カ月に一度の診察、また、「患者の会」では、闘病仲間と語り合ったりすることで、元気をいただいています。

親鸞聖人の教えと帯津先生の考え方には、多くの共通点があり、闘病生活を通じて双方から学ぶところが多々ありました。やはり、健康体で生きていくためには、常にニュートラルなところを維持していくことが大切です。そのためには、医療とあいまって、宗教的なところをもって生活できればと思います。このことは闘病中の仲間にも発信していけたらと思っています。

〈帯津良一氏の問題提起〉

■ 希望のある死

病状が悪化して、明るく前向きでいられる患者さんはひとりもおりません。皆さん暗くなります。人間は、本来明るく前向きにできてはいません。人間は寂しくて悲しいものです。これが当たり前なのだと思います。そうすると、もう下はありませんから。明るく前向きというのは一気に奈落の底へ落ちますが、初めから悲しいと思えば奈落の底へは落ちません。

ただ、それだけで生きていくには大変ですから、ここで希望、生きがいが大きくなってきます。患者さんにとって、一番大事なのが希望なのです。どんな状況にあっても、もう明日死ぬという人にも希望は必要なのです。まったく病気の無い体に戻るといふ希望もあっていますが、この希望はそういうことではないのです。要するに今日よりも良い明日という希望なので

す。今よりも良い状況です。

その希望をしっかり持っていくためには、先端を固定しなくてはいけないと思います。固定するとなると、死のところで固定せざるを得ないのです。未来に、はっきりしているのは死ぬことだけだからです。ですから、死に一回焦点を合わせて生を見るということが一番確かだと思うのです。

名誉院長講話のなかで、「死」について私が感じたことをいろいろとお話いたします。すると、皆さんがニコニコして聴いてくれます。大勢いますから、ひとりでその死を背負わなくてもいいという気楽さがあるのでしょう。末期患者への激励は酷であり、そのような善意はとても悲しいと思います。死の不安に苛まれている人というのは、その不安を和らげたいわけです。しかし、どうしても自分ひとりの力ではなかなか和らげられない。そういうときに、死について折に触れて考えているような人が側にいてくれることが、患者さんの不安を和らげることになるのです。ことばも説法もいらないのです。だから、医療者という道を選んだからには、自分の死のことを時々考えていなければならないのです。うちの職員には折に触れて、そう申しております。

やはり自分らしく、それこそ死の直前まで希望を持って生きていければ、道端で死んでも、どこで死のうといいのです。希望を持つことが大事なのです。それは、常に「希望のある死」です。その希望は、健康な状態に戻るという希望ではなくていいのです。今日よりも明日という感じです。そういう希望を持ち、死を考えている人たちが周りでサポートすれば、それが一番良いわけです。

■ 今後の医療の方向性

今後の医療は、ボディー（身体性）・マインド（精神性）・スピリット（霊性）、合わせて人間まるごと近づけていくことが課題だろうと

思っています。ホリスティック医学へ向かうという流れの中で、医療者はどういうところが必要か。それはもう過去のように、技術と知識を持ったひとりのプロフェッショナルとして、それを持たないアマチュアの患者さんに対していくというやり方はもう全く通用しなくなるでしょう。

ホリスティック医学は機械の修理と違います。相手のマインドとスピリットを高めるために、こちらのマインドとスピリットをもってやらなければいけません。そういう医療になってくるわけです。患者さんの希望をサポートするようなパワフル（powerful 力強さ）さと、相手の痛みが徹底的にわかるバルネラブル（vulnerable 弱々しさ）さを兼ね備えていることが要求されます。これこそ、本当の癒し人ですね。そのパワフルでバルネラブルであるためのもう一つの条件が、いつも死のことを考えているということです。自分の死に思いがいかないと、本当のパワフルとバルネラブルは出てこないのではないのでしょうか。「メメント・モリー（memento mori 死を思え）」というラテン語を引用して“PVM”（パワフル、バルネラブル、メメント・モリー）という3つが、これからのホリスティック医学というか、医療の流れの中での医療者の条件と言えるでしょう。

（文責：センター）

帯津 良一（おびつ りょういち） 医師

1936年生まれ。61年、東京大学医学部卒業。東大病院第三外科医局長を経て、現在、帯津三敬病院名誉院長。医学博士、調和道協会会長、日本ホリスティック医学協会会長。著書に『現代養生訓』『いのちの場と医療』『く気と呼吸法』（いずれも春秋社）ほか多数。

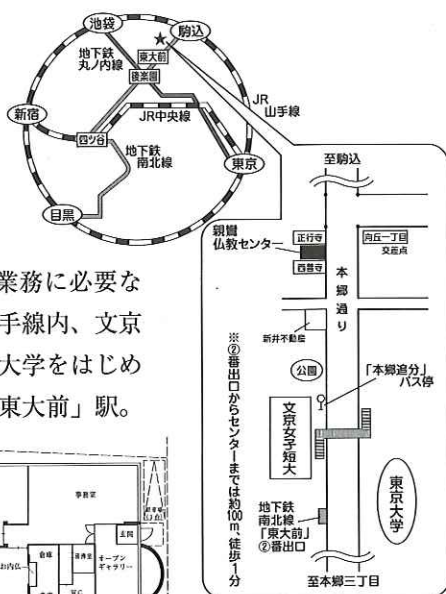


「現代と親鸞の研究会」 帯津氏（右）と篠崎氏（左）

親鸞仏教センター新事務所が完成

親鸞仏教センターは、本年2月1日、千代田区神田の仮事務所から新事務所（文京区向丘1-13-7=写真）に移転し、業務を開始しました。事務所は鉄骨造平屋建て（177.12㎡）で、オープンギャラリー（15.6㎡）、研究室兼書庫（42.9㎡）、会議室兼仏間（31.6㎡）、事務室（41.1㎡）、倉庫など、限られたスペースに当面の業務に必要な最小限の機能を備えています=平面図。場所は、JR山手線内、文京区のほぼ中央に位置する本郷通り沿い。近くには、東京大学をはじめ学術研究機関も多く点在し、最寄り駅は地下鉄南北線「東大前」駅。

2番出口を出て、山手線「駒込」駅方面に向かって徒歩1分（100m）=地図。



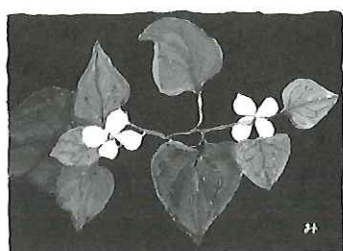
●センター新スタッフの紹介

研究員 田村 晃 徳

1971年生まれ。立命館大学文学部哲学科卒業。大谷大学大学院博士課程（真宗学）修了。大谷大学特別研修員を経て、前大谷大学非常勤講師。

研究員 櫻井 智 浩

1972年生まれ。大谷大学大学院博士課程（仏教学）満期退学。前大谷大学特別研修員。



あ と が き

千代田区神田の仮事務所立ち上げから11ヵ月、これまでご縁をいただいた識者の方々には、多大なるご協力を賜った。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。この間、特に『anjali』第2号発刊（1月15日）後、多くの方々からお手紙やメール、またお電話等をいただいた。その中から心に残る一通をご紹介します▼「不況がこうも長く続く中、企業はあらゆる手段を講じて競争力強化をめざしています。その目的のため、従業員評価を年功序列型から実績対応報酬型に代えていることから、ストレスが高じ、まじめな努力が必ずしも報われない社会になりつつあります。他方で、企業の組織運営にも倫理道德観を会社規範として教育し、社内・社外の監視機能を強化し、社会的存在として公明正大に生き続けようという企業努力がなされています。つまり、日本でも高度成長時代からバブル期までの仕組みから大きな変革を遂げているのであり、むしろ良心を強く求める社会という意味において、現代は宗教的時代ですらあると思うのです。海外では、企業経営ないし資本主義社会において、宗教が大きな影響を与えていることはよく知られているところですが、宗教学や思想学に馴染みがない人にとりまして、貴センターの試みが現代社会の持つ課題に迫り、心の安らぎの回復をもたらす契機とならんことをご期待申し上げます」（要旨）と。あらためて「浄土真宗を、生きた時代関心の中に開く」という、センター設立の願いの重要性を痛感する▼『anjali』そして『親鸞仏教センター通信』、さらには研究誌『現代と親鸞』の創刊をもって、当初目的の三誌紙の刊行が達成された。本『通信』は次号から年4回の発行になる。2年目を迎えるセンターは、新研究員2名も加わり、いよいよ本格的な活動に入ることとなる。皆さまの心からのご支援をお願いしたい。なお、本『通信』創刊号に引き続き、武田美輪様（江東区在住）には挿絵をご執筆いただきありがとうございました。（長谷岡）